

かにゐられ乍らも、他の者の真心からなる推薦と骨折りに依つて當選される様な、理想選挙の行はれる場合もございますから、絶対的の人格者である場合は又、格別でございます。

けれども普通の場合には、知識技能人格よりも、金の力の方が勝つのが例となつて居ります。

それがために金で買つて出た地位だといふ觀念が、代議士の頭にありますので、「大切な國民のために、獻身的努力しなければならぬ。」

といふ眞剣な心持が少うございます。

ために代議士といふ地位を利用して、私腹を肥し度いといふ様な心持から、自然と利權を焦る様な事になります。

たにお互に反對黨の内幕を發き合つたりして、騒ぐのであります。

議會は國民の代表である衆議院も、貴族の代表である貴族院も、原案を通過させま

すのには、半數以上の賛成者がなければ、どんなよい議案も通過させる事は出来ませぬ。

それですから政府を組織してゐる與黨は尙一層、我が黨の政策を行ふために、政府案を通過させなければなりませんので、與黨が絶対多數である様に、選挙に當つては懸命の努力をするのであります。

それでもまだ與黨の數の足りない時には、反對黨から切崩して來る事もあります。尙それでも足りない場合は、議會を解散して、總選挙を致します。

かういふ場合の選挙は、與黨と野黨とに分れて、火花を散らして戦つて、その投票の結果を見るのであります。

政府を組織してゐる與黨でありますと、全國の監督機關を、手足の如く動かしますから、大抵は勝つのがきまりの様になつて居ります。

議會が始つてからも、その議案を、通過させるさせないといふ争ひで、醜い争闘を

演じますので、之が毎日々々の新聞の記事に、大袈裟に載りますし、又漫畫などに、その人の顔や姿が出て來ますので、小さな子供でも、議會は争闘する所であるなどと信じ、又政談演説は、他人の悪口を言ひ合ふ所だなどと信ずる様になりました。

政黨政派の争ひが猛烈になつて、それが縣會市會町村會にも及びましてからは、人情が紙の様に薄くなり、國民の頭が進んで餘りにその裏面をよく知る様になりましたので、政治家を尊いと信じて、その人格を信用するといふ事が出來なくなつて終ひましたのが、今日の状態でございます。

昭和七年五月十五日、海軍や陸軍の士官候補生の方々が、帝都を襲撃して、重大問題を起され、犬養首相を狙撃されましたのは、自己の感情や利害のためではありませぬ。

國家は將に滿洲事變を中心として、世界に對立し、重大時局に立到り、舉國一致至誠を以て當らねばならぬ時に、國家の經濟と思想は、極度に亂れて、生活難に喘ぐ赤子は、到る處に續出し、一方この一大不況や滿洲事變を利用して、私財を富まさうと策動する、一部の富豪利權屋等が、續出して、益々國政は紊れ、民心が頹廢して、舉國一致の統制の、困難になつた實情を憂へて、自己の生命は天に捧げて、惟れ忠惟れ義の赤心に燃えて祖國の礎たらんとの念願から、あの事件を執行されたのであります。もとより國法を犯されたのでありますから、法の廷で裁かれて罪はお受けになりましてけれども、その君國を思ひ、國民の萬福を祈るの義心の尊ごさは、鬼神をも泣かしめられたのであります。

しかし總べて之は、昭和八年以前の出來事でございます。過去となつて終つた今では、永い間の政黨政派の争闘も、かくして清算されたのでありますから、政治家も國民も同様に、過去における自己が、餘りにも國家に對して無責任であり、無自覺であつたといふ事實に目覺めたのでありますから將來再びかゝる事が、我が國に起らない様にするためには、總べての國民が、政治家、教育家、宗

教育家、一般國民の何人を問はず、皆信仰的信念からなる、道念を以て、何事を成すにも、我が使命を真心を以て、正しく行ひ、君國と共に榮える様に、心がけなければなりません。

さういふ風に人の心の生活が、清らかに改つて参りますと、失はれた信用も恢復され、人情の花も、又再び世に咲き匂つて、國は明るく朗らかになつて、お互の正しい心の道が廣くなりますから、進みよい世になつて参ります。

さうなれば國力は自然に強くなつて、世界の信用も厚くなり、戦争などはしなくとも、日本が協力一致の國體の威力で、世界の民心を治めて行く事も、出来る様になります。

これがためこの非常時日本におきましては、今こそ政治も教育も、一大革命の時であります。

天職を尊べ

問「世の中には、職業も色々ありますが、その中でも何が一番趣味あり、又利益があつて、面白いでございませうか。」

答「人の顔形が千差萬別である様に、その心持もその人々に依つて違つて居りますから、一概に決める譯には参りません。

その性質に依つて、農を好む人も、商業を好む人も、工業に就く人も、政治家、教育家、軍人といふ風に、色々職業を好むのでございしますが、その大なり小なり、先天的に持つて生れた、個性の要求する職業を選ぶといふ事が最もよいのです。

それでありますから、小さい時からよくその個性を調べて、その子の天性であると思

じましたら、その子の望む道に學問を勸ませるのがよいと思ひます。

學問の嫌ひな子供に、幾ら親が進めても進歩するものではありません。

その反對に好きな道を無理に止めさせますと、性格がこちれて終つて、眞面目さ純眞さを失つて、一生を誤つて終ひますから、親の主義に依つて動かす事は出来ません。それでありますから、親も充分注意しなければなりません。本人自身も、自分の性質を考へて、これならば必ず力を入れてやり抜くといふ、職に向つて進まなければなりません。

例へば農業に就いた場合、土に對する感謝もなく、農業に對する趣味理想もなく、唯ぼんやりと、田畑を耕すだけでは、立派な農夫にはなれません。

農夫になつたら、農業を無上の幸福として土に親しみ、神様の御技のお手傳ひをさせて頂くのだといふ、朝に夕に土と天に祈り感謝しつゝ、眞心を土に打込んで、汗と愛を惜しまず、種を培つて參りますと、尊い神の御技に依つて、様々の穀類や野菜や

果物が、芽を吹き花を咲き、實がなつて、限りなく心を樂しませ、又生命を養つて呉れます。

外の職業は人を相手の事が多いので、時々眞心が先へ通じない事もありますが、土を相手の農業は、盡しただけの眞心は、皆受け入れられて、天は徳を興へて下さいます。

その眞實の尊さを感謝して、農夫になつたら、いつも天地に感謝し、明るい朗らかな氣持で微笑み乍ら、元氣よく神様の御技をお手傳ひする事を喜んで、朝に星を頂いて野に出で、夕は月影を踏んで家路に就き、一家團樂して樂しむといふ喜びは、他の職業には、味ふ事の出来ない詩の世界である事を、知らなければなりません。

感謝して汗を流す所にのみ、誠の幸福は存在してゐるのであります。

商人になりました場合は、多く人を相手の事でありますから、自分ばかり利益を得やうとして焦れば、必ず信用を落しますから、自分にも利益を得ると同時に、お客の

利益も常に考へて、親切な心で、真心からの商賣をしなければ、家運は繁榮しません。商法を致しますのには、努力を厭つては到底成功は出来ません。成るべく身と真心を働かせて、安くて品物のよい物を仕入れ、信用のある固い品物を顧客に賣つて、何時までも喜ばれ、永久の顧客として、得意を殖やす事に努力しなければなりません。

假令物を賣るのが目的であつても、人を相手の商賣では、愛嬌も必要であり、親切も大事でございませうから、言葉優しく親切に、客に親しく取り入る様に心掛けなければなりません。

寒い時には熱いお茶を供するものも、商賣の徳を積む方法でありませうし、暑い時は又冷い飲物を供し、その苦痛を稿ふといふ事もよい方法であります。

品物は不良品不正品を賣らない様によく調べ、信用のある儲かなものを、正直に賣らなければなりません。

又買出しなどは、川來る事なら現金買ひにする様にすれば、大變勉強して問屋が卸しますために、利益も多いのでございませう。

反對に品物を借りて取つて居りますと、問屋の方でそれだけ利子を見ますから、大變高いものを買はなければなりませんし、又お金を拂ふ事のために、纏めなければならぬ心配や色々で、家内中がいつも朗らかに、心面白く出来ない場合もございませうし、時にはお客に對しても、何となく不愉快な顔を見せる様な場合もないとも限りませう。

いつもにこくとして朗らかな顔で、元氣に満ちて、商賣も面白く致しまして、客を引きつけ、信用を増して、家運を榮えさせますのには、どうしても今申した様に、真心から、常に人のためを考へて、我も榮えるといふ、尊い信念のある働きをするといふ事が最も大切だと思ひます。

その他工業にせよ勤め人にせよ、自分の職業に對しては、天が自分に與へて呉れた

天職だと信じ、寝ても覚めても責任を以て義務を重んじて、真心を以て真剣に勤めま
すならば、上からは認められ、下からは信用されて、いつとなく幸福な地位が得られ
ます。

職業に貴賤貧富の別はありません。

どんな仕事でも、之を尊び愛して、真剣で努力致しますと、必ずその職業に依つて
その人は重く用ひられ、人格が輝いて参りまして、絶対的の仕合せが得られるもので
ございます。

誰も人は職業の區別を考へるよりも、自己の天職を尊く生かすといふ事に、専念に
努めなければなりません。

星の花

祭の夜

麗らかな春の宵でございます。

本州から遙かに離れた此の島は、都の様な科学的文化の華は咲いては居りませんが
原始時代乍らの、自然の花が、山にも野にも里にも、今を盛りと咲き亂れ、磯には朗
らかに浪が寄せては返して、神秘的な音調を響かせてゐます。

神の御技の天然の美は、この島の上に恵まれたかとも思はれます。いつの年も櫻の花の満開の時、四月八日に鎮守の森の祭りが行はれます。この日は朝から島人は、漁も休み、山仕事も野仕事も休んで、朝から祭の歡樂に耽るのであります。

晝から續いた祭の夜宮は、夜に入ると尙賑はじうございますので、若人達は夜の帷が邊りを包む頃になると、先を競うて集り、花の下に美しく囃子面白く練つて行く花車の中に、歡樂境に陶醉するのであります。

この祭はその年の漁も豊かに、作物も豊年である様に、鎮守の神に祈願するのであります。

この歡樂の世界を他所に、裏濱の静かな崖の上に、美しい月に照らされ乍ら、しみじみと語り合つてゐる男女二人の若人がありました。

青年は二十四五で、日焦けのした男らしい顔の、體格の頑強な、田舎の青年として

模範的容貌を備へてゐます。

女は十九か二十歳位で、すつきりとして色白く、こんな島には珍らしい、器量よしで、言葉遣ひもはつきりした娘です。

祭の賑やかな囃子は、微かに聞えて來ます。

二人はじつと耳を傾けて、聞いてゐましたが、聽て娘は言ひました。

「春吉さん。

貴方脱けて來て悪くなかつたの？

みんなで捜してゐやしないか知ら？」

「大丈夫だよ。

自分のするべき事は、みんなして終つて來たんだから……。

私があるなくつたつて、ちつとも困りやしないよ。」

「さうか知ら？ さうならいゝけれど……。」

「それより、艶ちゃん。」

お前、友達が探してやしないかい。」

「さあ、探してゐるかも知れないけれど、何處かへ紛れてゐると思つてゐるでせう。だつて私、人に揉まれて、お祭りなんか、見てゐる度くないもの。」

「さうかい。矢張りかうして、二人切りの世界で、話をする方が、艶ちゃんも好きなのかい。」

「え、だつて貴方、

明日から又暫くお別れなんですもの。」

「別れだと言つた所で、僅か一月じやないか。

夢の間だよ。すぐに日は経つて終ふよ。」

「それはさうですけれど、三年も兵隊に行つてゐらして、歸つたばかりで、又出かけるんですもの。」

「それは仕方がないよ。」

前はお國の爲に入營してゐたんだし、今度はこの島のために、模範漁村や農村を視察に行つて来いと、村長さんや校長先生が言つて、旅費まで出して呉れるんだから……。

澤山青年がある中で、私に言ひつけて貰へた事は、私としては本當に有難い事だと思つて喜んでゐるんだ。

だから出来るだけ骨折つて、模範的の漁村や、水産組合の状況や、農村經營などを視察して来て、この島の青年達と協力一致して、大いにこの島の改革をしようと思つてゐるんだ。」

「その代り今度歸つて来れば、何處へも行きやしないでせう？」

「勿論さ。この島に生れた者は、神様がこの島を幸福にする様に生んで下さつたんだもの、外へ行く必要があるものか。」

島のために真剣で働くんだよ。

それに艶ちゃん、伯父さんがさう言つて見えたぞらう。

この秋は結婚させるつて……。

それは本當だらうねえ。」

「さうよ。本當ですわ。」

一日も早く貴方に来て貰つて、樂隠居するんだつて、お父さんは貴方が軍隊にゐらつしやる中から言つてゐた位よ。

ごんなに待つてゐるか分らないのよ。

貴方が歸つて來たら、すぐにも結婚式を擧げるつもりだつたらしいけれど、一生に一度の事だから、座敷を直したいとか、器を少し買ひ度いからなんて、秋まで延ばしたんですわ。」

「あつは、、、、、

矢張り昔の人は物堅いからね、小父さんもそんな事を言つてたんだらう。

何も私達が結婚するのに、わざわざ普請をしたり、器を買ふ必要もないじやないか。」

「でもさうは行きませんわ。」

村の主だつた人もお招きするんでせう。

だから一生に一度の事に、餘りの事もし度くないと思ふでせうし、私にしても出来るだけは立派にし度いんですもの。

お嫁入りの時の着物だつて、東京へ行かなくちや、氣に入つたものは買へやしませんわ。」

「艶ちゃん。」

お前何を言つてるの？

島で生れた者は、島相應の結婚式をすりやいゝんだよ。

この島の娘で、誰が東京から衣裳を買つて来た人があるの？
さういふ事を言ふのは、一種の虚榮心でよくない事だよ。
結婚の時に一寸着る着物位、ごんなのだつていゝじやないか。
結婚の目的は、お前とわしが體が一つになつて、幸福に働いて家のため又この島の
ため、大きく考へれば、お國のために努力すればいゝんだから……。
ねえ、さうだらう。」

「だけど、春吉さん。」

人は唯働くためだけに生れて来たのではないと思ふわ。

だから楽しみがなくちや、生き甲斐はありません。

ですから一生に一度の結婚の時位、綺麗なのが着たいわよ。

この間主婦の友に、素晴らしいお嫁入りの衣裳が出てゐましたの。

それは櫻に孔雀の模様で、本當に目の覚める様なの。

私あれが欲しいの。注文すれば送つて来るさうです。

値は少し高いと思ふけれど、三枚襲ねで百八拾圓で帯が百五拾圓だつて言ふけれど

何とも言はれない綺麗ないゝものですの。

だから私あれを、お父さんに頼んで買つて貰はうと思つてゐるの。

まだその外にも色々いるものがあるから、一緒に買ひ度いから、東京へ行つて来た

いのよ。」

「艶ちやん、お前何を言つてるの？」

都に住む大家の令嬢ならまだしも、こんな島に住んで、農や漁をして生活してゐる

者の娘が結婚するのなら、木綿の紋付位が分相應じやないか。

貳百圓も參百圓もかけて、嫁入りの衣裳を拵へる必要が何處にあるの？

艶ちやんは、この頃雑誌なんか餘り見るものだから、知らぬ間に虚榮心が高くなつ

たんじやないかい。」

「そんな事はないわ。」

「だけども、都に住む大家のお嬢さんだつて、島の娘だつて、美しいものを美しいと思ふ人情に變りはないわ。」

「私だつて若いんですもの、美しい着物を着て悪いといふ規則はないのですから、一度位着たつていゝじやないの？」

「それりや悪いとは言はないけれど、お前が若しそんな贅澤な事をする、この村の娘達がみんな見習つて、そんな事をし度があると親が困るし、第一冗な事に島の金が都へ吸ひ取られて終つて、貧乏になるから、青年團長といふ責任上から言つても、私はそんな事は反對だよ。」

艶子は怨めしうに、春吉の顔を見凝めて、

「春吉さんはさういふ事を言ふから私は嫌ひよ。」

質素だ勤儉だなんて、そんな堅苦しい事を言つてゐる間に、一生が過ぎて終ふじや

ないの？」

「櫻だつて三日たてば散つて終ふんですもの。」

「私は二度も來ない若さを、思ひ切つて楽しみ度いんですの。」

「艶ちゃん、何時でも現在主義の享樂を求めたがるけれど、それはお前の悪い所だと思ふ。」

「言ひかへて分りよく言へば、艶ちゃんどわたしが婚約したのは四年前だ。」

「お前が十六、わたしが二十だつたね。」

「二人共その事を承知した以上、年頃から言へば、そんなに親しく交つたつて、誰も噂をする人も悪口を言ふ人もない譯だが、今日迄かうしてお互に純潔で來たのは、

お前は何の爲だと思ふの？」

「それは貴方が變屈だからじやないの？」

「艶ちゃん。お前はさういふ風に單純に考へるからいけないよ。」

それは私が變屈なからじやないよ。

お互に二人が結婚してから後の生活を、一層幸福に純真にして生きるために、結婚前の純潔が、絶對的に必要だったからだよ。

何れは結婚する婚約の間柄であつても、矢張り神様に御報告して、一般の人に披露する迄は、純潔でなければならぬ。

それが又結婚後に、どれ程二人の愛情を固く結びつけて呉れるかといふ事を思ふと現在の感情に打克つて行くために、私は随分努力して来たつもりなんだ。

その代り精神的じや、艶ちやんの總べてを、始終胸に抱いて、軍隊にゐた三年間でも、少しも忘れた事はなかつた。

それは私の偽らない告白なんだ。

その事は艶ちやんだつて、よく分つて呉れてゐるだらう。」
「分つてゐるわ。」

私だつて、月のよい晩なごいつも此處へ来て、貴方のゐる都の空を眺めては、貴方の名を呼んだわ。

唄を歌ふ時だつて、いつも貴方の事ばかり思つて、夢の様に唄を歌つたわ。」
「有りがたう艶ちやん。」

お互に四年は、本當に幸福に暮したね。

しかし婚約時代の四年間も愈々終つて、秋から二人は本當の夫婦になつて、協力して働いて、總べての生活を樂しまなくちやならない。

だから艶ちやんも、若い時代に見續けて来た、花の様な夢から醒めて、現實の生活を、しつかり樂んで貰はなくちや。

ねえ、分るだらう。」

「分つてゐますわ。」

私だつて、どんなにその時を待つてゐるか知れないの。

「だけごまだ秋までは長いね。」

「すぐだよ。夏を一つ越すだけだ。」

「でも待遠しいわ、私……。それより今度視察に行ったら、何時歸るの？」

「はつきり分らないが、來月の十日頃になるか知ら？」

「長いね。行く先々から手紙を下さいね。」

「屹度出すよ。その土地々の繪葉書に、たよりに書いて寄越すよ。」

そして艶ちやんに、土産を買つて來たいが、何がいゝか知ら？」

「さあ、何がいゝか知ら？」

さうく、私欲しいものが一つあるの。」

京都へゐらしたら、箱迫を買つて來て下さらない？」

「箱迫？ 箱迫したら、お嫁入りの時に、胸に入れる、お守袋の様な、赤い錦襦で造つた、簪のついたものだらう。」

「えゝ、さうよ。」

「そんなもの、お前どうするの？」

「分つてゐるじやないの。」

お嫁入りの時に持つんですわ。」

「そんなものは、こんな島じやいらなないじやないか。贅澤だよ。」

「だって儀式には必ず持つものだわ。」

それに結婚した者同志の、幸福になる様に縁起を祝ふお守りなんですもの。」

「さうかい。さういふ尊い因縁のあるものだったら、買つて來て上げるから、喜んで待つてお出でよ。」

「屹度よ。私本當に嬉しいわ。」

貴方が歸る日は、濱へ出て私待つてるわ。」

「私もそれを喜んで歸つて來るよ。」

では餘り遅くなるといけないから、お祭りの方へ行つて見よう。」

「私もつと此處で遊び度いのよ。貴方と二人きりで……。」

「何を言つてるの？ 子供みたいに……。」

結婚すれば厭になる程、二人で一緒にゐられるんじゃないか。

今の中に別れてゐる時の淋しさを、しみぐと楽しんでおかうじやないか。」

「あら、おかしい人。」

別れてゐる時がどうして楽しいんでせう。

私淋しい時は、獨りで泣けて來るのよ。」

「泣いて御覽、私が此處で見えてゐるから……。ね、私の可愛い艶ちやんは、まだこんな子供だよ。」

と言ひ乍ら、抱擁して頬摺りすると、

「いやな春吉さん。私子供じやないのよ。」

二人は譯もなく、情愛に陶醉して、未來の美しい夢にあこがれ乍ら、森の方へと歩を進めましたが、何時か森では囃子の音も絶えて、唯波の音ばかりが、高く響いて來るのでした。

嵐の朝

春吉が視察に出發してから、二週間程過ぎた或夜、俄かに海が暴風雨で、一晚中物凄く荒れました。

馴れた島人達も戦々恟々として、夜の明けるのを待ちました。

漁師の舟は幸ひ、岸へ引上げられて、陸へ繋がれてゐましたし、昨日から用心して沖へ出てゐた者もないので、溺れた者は幸ひにもありませんでしたので、皆がほつと

しました。

翌日夜が明けて見ると、大波小波に押されて、島へ打上げられた様々のもので、岸邊は大混雑でございます。

艶子も村人と共に早朝から、濱へ行つて、此處彼處と濱の様子を見て廻りました。何時も春吉と二人で、楽しくく語る崖の下に、泥に塗れて、大學の制服を着た、二十四五の學生が一間位の丸太を抱えたまゝ倒れてゐます。

艶子は

「大變です。誰か来て下さい。」

と叫びました。

「何だい艶ちゃん。何かあるの？」

「人が死んでゐます。」

水に溺れた人がゐるのです。」

みんなが驚いて、集つて来ました。

その中には艶子の父の與平も交つてゐます。

「やあ、こりやあ年の若い學生さんらしい。」

矢張り昨日からの暴風雨で、難船して此處へ打上げられたんだらう。死んで終つてゐるか知ら？」

どみんなで體を動かして見ると、不思議にまだ温味があります。

「おや、まだ温味があるよ。」

これは不思議だ。早速手當をしなくちやいかん。」

どみんなで服を脱がせ、水を吐かせ、藁火で温めて、醫者を呼んで手當をしました。すると學生は、間もなく目を見開きました。

村人達は聲を上げて喜びました。

「さあ、こんな濱では養生も出来ないから、何處かへ連れて行かなければ……………」

と相談してゐましたが、聽てその中の一人が
 「與平さん、貴方の所はすぐ近いし、座敷も廣いから、一つ世話して貰へないだらうか。」

「よろしい、何も因縁だから、私の所で世話しやう。」

お艶お前うちへさう言つて、座敷に仕度をしておけ。」

「お父さん、その人をうちへ連れて行くのですか。」

「あゝさうだよ。早く行つて仕度をせよ。」

「さう、じやすぐ支度しておきますから……。」

と艶子は何故か、そわ／＼して足も軽く走つて行きました。

この學生は間もなく、與平の家へ、村人達の手によつて伴れられて来て、養生する事になりました。

人の情

見知らぬ溺死者を一人救つたといふ喜びに、有頂天になつてゐる與平夫婦は、

真心を以てこの若者の爲に、至らぬ事のない迄に、行届いた世話をしたのでした。

若者は日増に力づいて、總べてを意識すると、思はぬ暴風雨のために、船を凌はれて、幾時間大波小波に漂つてゐたのが、生への執着から、丸太に必死の力で取紐つた覚えはありますが、それから後の事は覚えがありません。

それから濱で目が開いた時、見慣れない人達が覗いてゐたのははつきり目に映りましたが、それから又深い眠りに落ちたので、目が覺めて初めて、この家の座敷に横になつてゐたのを知りました。

親切な老夫婦と、島には珍らしく美しい娘の、懇ろに世話をして呉れるのを知ると

深く感謝して、命の恩人だと、心に深く合掌するのでした。

段々力づいて、口も利かれ、床に起上る事が出来る様になると、唯譯もなく喜んで「僕は到底助からない命を、皆様のお蔭で救つて頂きました、本當にありがたうございました。」

「この御恩は一生忘れません。」

「いや、助けたのがごうのといふ事はありません。

御壽命があつて助けられたのです。

全く貴方の運が強かつたのですよ。

それにしても一體貴方は、どうして海に吞まれたのです。」

青年は疲れも忘れた様に、明るく微笑んで、怖ろしい出来事を追想する様に語りました。

「僕等は昨日の日曜を利用して、七里ヶ濱へ遊びに来て、ボートを漕いでゐたのです。

所がどうも今日は暴風雨が来さうだから、沖へ出るのは危険だと、注意されたのですが、天候は暴風雨さうにもないので、

「何がこんな天候でしけるものか。」

と變な意地も手傳つて、威勢に委せて、沖へ漕ぎ出して終つたのです。

そのうちに晝頃から、波が高くなつて、激しい嵐に、舟は木の葉の様に大波に揺られてみんなが悲鳴を上げてゐたのですが、間もなく轉覆して大波の中へ捲き込まれて終ひました。

今思ふとゾツとします。

僕は多少水泳の心得があるものですから、波に乗つて方角もかまはず泳いだのですが、體は綿の様に疲れて、直きに泳げなくなりました。

もう駄目だと思つた瞬間、大きな丸太が目の前に浮いてゐましたので、それに取縋つて、又暫く波に揉まれてゐましたが、その中に全く意識を失つて終ひました。

それから幾時間たつたか知れませんが、夜明にこの島へ打上げられて、皆様に救はれたのです。

全く九死に一生と言ひ度いが、千萬人の中にもない生命を救はれました。

これが奇蹟と申しませうか、俗に言ふ天佑でございます。

僕の生命が、かうしてある事は、全く不思議といふより外ありません。」

「それは大變な事でした。

それで自宅は何方ですか。」

「宅は東京の麻布で、父は堤周造といふ實業家で、僕はその次男の直人といふ者で、

〇〇大學の學生です。」

と事實そのまゝを、純真に物語りました。

それを聞くと老夫婦は、一層親しみを以て懇ろに世話をしました。

「兎に角何よりも先に、御両親の所へ、お助かりになつて此處にゐらつしやる事をお

知らせしなければなりません。」

と言つて、早速直人の實家へ、電報を打ちました。

するとすぐに

「安心した。すぐに行く。」

と返電があつて、その翌日は、兄だといふ紳士と、親戚の人が二人でついて来て、與

平一家や村人達に、厚く禮を述べて、一緒に歸らうとしました。

けれど直人は衰弱が甚しいので、旅は出来ないといふので、今一二週間止つて、

養生する事になり、親戚の者二人は先に歸りました。

兄も五日程ついて、世話をして居りましたが、全快したら又迎へに来るからといふ

ので、後を萬事この家に頼んで歸つて行きました。

直人はこの家に引取られてから十日位すると、すつかり元氣が回復して、一人でそ

の邊りを散歩が出来る様になりました。

東京の實家からは、洋服和服初め、珍らしい食物や、慰みにと言つて、食物を送つて來たりしますので、體が回復するまゝに、理髮屋へも行つたり、着物も着更へたりしましたので、姿が調つて、この邊りには見る事も出來ない美青年になりました。艶子は直人が病床にゐる間から、親切過ぎると思ふ程、真心こめて何かと世話をしますので、直人も何時となく、艶子の心に唯感謝するといふ心持以上に、一種の親しみをさえ感じる様になりました。

その間にも直人は、常に艶子が自分の傍へ來る度に、都の話をしては喜ばせます。歌舞伎座や帝劇の話、淺草や銀座の夜の町、三越白木屋等の大きなデパートの話、ダンスホールの夜の歡樂境といふ様な事を、事實より大袈裟に都の豪奢な生活振りを話して聞かせて、艶子が眼を瞪つて喜ぶのを見ては、唯譯もなく樂しむのでした。

直人がこの家に来て、艶子と親しみが深くなるにつれて、いつか艶子の心から、春吉のあの力強い、苦み走つた凜々しい姿は、次第に影が薄くなつて、今は全くその片

影さえ消えて終ひました。

それ程に艶子の心は、直人の方に傾き盡して終つたのです。

両親は艶子の様子に不安を感じて、

「お艶、うつかりして都の人に欺されて、間違ひでも起しては大變だから、氣をつけなければいけないよ。

あの人は相當身分のある人の息子だから、立派な家へ養子に行くか、又はよい家のお嬢様をお嫁に貰ふに決つてゐるから、うつかりして、口に欺されて、弄びものになつたりしてはいけない。

お前には春吉といふ、立派な婿が決つてゐるんだから……………」

艶子は、如何にもうるさいといふ様に、

「お母さん。今更そんな事言はなくても分つてゐるわ。」

と取合はずに、時々直人の室へ入浸つて、時には呼んでも出て來ない事さえありま

す。両親は心配して

「困った事だ。あんな事をしてゐて、間違ひでも起らなければいゝが………」

と思つてゐる中に、東京から

「明日兄が迎へに行く。」

といふ電報が来ました。直人は元氣よく、その電報を見せて、明日は歸ると言ひますので、両親はそれとは言はないが、

「やれまづよかつた。」

といふ安心に、内心非常に喜びました。

艶子はそれとは反對に、如何にも怨めし氣に直人の顔を見上げました。

直人は微笑んだまゝ、何も言ひませんでした。その夕方二人は両親に告げもせず、闇に紛れて濱へ出ました。

月もないので邊りは眞暗で、唯波の音のみが、ごう／＼と響いてゐます。

腰かけた岩は、半月程前に、春吉と艶子がかけて、未來を樂しんで語つたその岩なのです。

悪魔は微笑む

直人はしんみりとした聲で、艶子の手を取つて囁くのでした。

「艶子さん。不思議な御縁で助けて頂いて永い間お世話になりましたが、明日はお別れして、この島を去らなければなりません。」

「本當に貴方はもう、東京へお歸りになるのですか。」

そしてこの島へはもうお歸りになりませんか?。」

「僕が東京へ歸る事を、貴女は惜んで呉れますか?。」

「まあ貴方は、私が何とも思はないで、お見送り出来るとお思ひになつて？
それは餘りでございますわ。」

「それでは貴女は、僕と別れる事を名残惜しく思つて呉れるのですか。」

「私………。お別れするなんて事考へると、胸が一杯になつて終つて、生きてゐる
氣も致しません。」

「それは本當ですか、艶子さん、

本當は僕も貴女が好きでくならないのです。

出来る事なら一生一緒に暮し度いと思ふのですが、貴女には春吉さんと言ふ立派な
許婚の方があつて、秋には結婚なさるんだつてね。」

「まあ、誰がそんな事を申しましたの？」

「お父さんでせうか、それともお母さんでせうか。」

「艶子さん。そんなに驚かなくていゝですよ。」

それは本當の事でせう……。だからお父さんからもお母さんからも聞かされまし
たよ。」

「まあ、厭なお父さん、お母さんもそんな事を申しましたのですか。」

「どうしてそんな事を貴方に言ふ必要があつたのでせう。」

「そんなに怒らなくてもいゝじやありませんか。」

それは餘り僕と親しくなつて、變な仲にでもなると、大變だと思はれたから、用心
のために聞かせて下さつたのですよ。」

「それだつて、春吉さんなんか、父や母が勝手に決めたので、私はあんな人の事なん
か、何とも思つてゐませんのよ。」

「冗談でせう。貴女は眞剣で春吉さんを愛してゐて、春吉さんも貴女を、命がけで思
つてゐるのでせう。」

「違ひますわ……。私本當にあんな人、何とも思つてゐやしませんの。」

春吉さんは、私の事をどんなに思つてゐるか知れませんが、私が厭だつたら、仕方がないじゃございませんか。」

「それは本當ですか。」

貴女は春吉さんと結婚する事を、全く喜んでゐるのですか。」

「誰が喜ぶものですか。」

「こんな淋しい島で、一生眞黒くなつて、百姓や漁師をする人と一緒になることなんか……。」

「では貴女は、この島で農業したり、漁に楽しむ事は厭なんですか。」

「え、私とても厭ですわ。」

「心からこんな田舎厭ひなんでも、本當に都へ行き度いと思ひますわ。」

「本當にさう思ふの？ 艶子さん。」

「それだつたら、僕と一緒に東京へ行きますか。」

全く艶子さんの様な美しい人を、お百姓をさせたり漁師の妻にしておくのは、惜しいと、初めから思つてゐましたよ。

貴女なんかは都へ出て、女學校へでも入つて、少し東京の水で磨き上げたら、天女のように美しくなれる人です。

さうして結婚すれば、どんな華族さんの奥さん達と一緒に並べたつて、押しも押されもせぬ令夫人となれるのです。

こんな田舎に貴女を置くのは、寶玉を土の中に埋めておく様なものです。

玉は磨いてこそ、光が出るのです。

東京へ行きますか。つれて行つて上げますから……。」

「それで私はどうなるのでせう？」

「分つてゐるじやありませんか。」

貴女が僕を本當に信頼する事が出来たら、僕は両親や兄に許して貰つて、分家

させて貰つて、貴女と二人で楽しい家庭を持ちますよ。」
 艶子は餘りの嬉しさに、激昂して

「まあそれは本當でせうか。」

本當に私と結婚して下さいますの？」

「本當ですよ、神明に誓つてお約束しますよ。」

でも貴女は春吉さんといふ方とお約束があるのですから、そんな事をしてはいけな
 いでせう。」

「いゝえ、春吉さんなんか、ちつとも私愛してゐませんし、春吉さんだつて、私の
 心持は分つてゐますから、屹度破談にしたつて平氣ですわ。」

私が貴方と東京へ行けば、自然に話なんか、片付いて終ひますわ。」

「本當に艶子さん、行く氣がありますか。」

「今の言葉が本當でしたら、假令両親が何と申しましても、親戚が何と言ひましても

かまひません。」

私何時でも貴方の所へ参りますわ。」

「本當に貴女がそれだけの決心をして、僕の所へ来て下さるなら、僕は貴女の心に報
 ゆるために、どんな事でもします。」

貴女の欲しがる着物なら、どんな着物でも買つて上げます。」

又行き度い所があれば、どんな所へでもつれて行つて上げます。」

一生決して不自由させる様な事はありませぬ。」

そして一生貴女だけを、妻として愛しますよ。」

「本當にそれを誓つて頂けますの？」

「誓ひますとも。」

本當に貴女が、春吉さんの事を屹度忘れて、僕の所へ来て呉れるといふ事が誓へる
 なら、僕も眞心から今言つた事を誓ひますよ。」

「私、貴方の所へ、屹度行きます事を、神かけて誓ひますわ。」

「では僕も、貴女と結婚をするといふ、堅い誓ひのためにこの指輪を上げておきませう。」

と右の細い紅指に指してゐた金の、ハート型の指輪を脱いで、艶子の左手の中指にはめました。

艶子は唯譯もなく喜んで、その指輪を闇に透かして、目を輝やかせて見凝めるのでした。

深黒の闇に包まれた二人は、その上何を囁いたのか分かりませんでした。天魔は波の彼方から物凄く微笑を湛へて、二人の上に迫るのでした。

純情

直人が東京へ歸つた後、艶子は何となくそわ／＼として落着がありません。

三日目毎に届く直人からの手紙を、貪る様に両親にかくして讀み乍ら、春吉からの手紙は、開封もせず、そのまま机の引出しに入れて終ふのです。

そして両親が止めるのを聞かず、艶子は直人から、

「東京見物をさせてやり度い、又お世話になつたお禮に、女學校へ入れて上るから、上京して来て呉れる様に。」

と言つて寄越した手紙を見せて、頻りに東京へ行く事を両親にせがみます。両親は呆れ果て、

「今頃何を言つてゐるのだ。」

この田舎に住む者が、女學校へ入るどころの沙汰じゃない。

お前幾つだと思つてゐるのだ。もう二十歳じゃないか。

それに秋は、春吉と結婚しなければならぬじゃないか。」

と宥めると、

「私春吉さんなんかと、結婚しやしませんよ。」

東京へ行けば、二度とこんな島なんかへ、歸つて來たりなごしないんですから……

……………」

「何を言つてゐるんだ、お艶」

お前は矢張り、あの堤といふ男に欺されて、そんな考へ違ひをしてゐるに違ひない。東京邊りの人間は、口先では旨い事を言つて、何も知らない田舎娘を、欺すけれどもすぐに飽いて終つて、見返しもしないに決つてゐる。

田舎ではこんな狭い所だから、容緻がいゝなんて言はれるけれど、都へ出て行つたら、もつとく美しい目の覺める様な人が幾らでもあるんだ。

こんな所で美しいなんて言はれる事を本當に受けて、出て行つたりした所で、お前なんかは、野末の野菊程にも思はれやしない。

どうせ散々な目に遭つて、命でも捨てる位が關の山だ。

親は悪い事は言はないから、さういふ間違つた心を起して、悪い人に欺されてはいかぬから、決して東京邊りへ出て行くんじゃない。」

と両親は涙聲になつて、艶子の迷ひ心をさまさうと、眞心を盡して説きつけましたが却々艶子は耳を傾けません。

「いゝわ。私は假令お母さんやお父さんの言ふ様に、あの人の弄び者になつて捨てられても、一生花やかな都で生活が出來れば……………」

一生でなく、一日だつて幸福ですわ。」

両親は途方に暮れ、呆れ返つて、どうしてこの心を翻させようかと、苦心してゐますと、思ひがけなく春吉が歸つて來ました。

さうした變つた事情が起つてゐやうとは思ひませんので元氣の溢れる様な聲で、

「小父さん、小母さん、永い事留守にして、御無沙汰してゐましたが、皆様お變りはございませんか。」

「やあ春吉か。」

何時歸つて來た。」

「晩の船で着いて、家へ歸つて一寸休んで、着物を更へて來ました。」

「さうかく、無事で歸つて來て好かつた。」

ちつとも知らずにゐて、迎へにも出なかつたが、何故先に知らせなかつたのだ。」

さう言はれると、春吉はきまり悪さうにちらと、艶子の顔を見て、

「小父さんには知らせなかつたが、艶ちゃんには今日五時に着くとお知らせし

たんですが……………」

ねえ、艶ちゃん、知つてゐたでせう。」

と言はれると、艶子はまごついて、

「え、、だけど私、お腹が痛かつたので、お迎へに行けなかつたの。」

何ごいふ冷い表情でせう。

その聲も別れる前の祭りの夜とは、大變な變り方です。

「お前知つてゐたなら、何故わしに言はなかつたんだ。」

「私ちやんと話したけれど、外の話をしてゐて返事をしなかつたじやないの？」

「嘘を言ふな。」

毎日もう春吉が來る頃じやないかと、何遍尋ねたか知れやせんのに。」

「私そんな事ちつとも聞かなかつたわ。」

母のお鈴は聞き兼ねて、

「まあ、後の事をそんなに言たつて仕方がないから、いゝじやないか。それよりもお艶、

春吉さんが久し振で歸つて見えたんだから、ゆつくりして頂く様にお茶でも出さない。

春吉はごうも様子が變だと思ひました。

「小父さん、私が行つた後で、何事かありましたか。

艶ちやんの様子が、ごうも變な様ですが……。」

「なにも別に變つた事もあつた譯じやないが、相變らず我儘な奴だものだから……。」

「小父さん、今道で一郎君から聞いた事ですが、僕の留守に、東京の堤とか言ふ學生が暴風雨のために海に溺れて、打上げられたのが助かつて、此處で養生して、歸つて行つたさうですね。」

「あゝ、お前それを聞いたかい。」

一郎さんがその外に、何とか言つてゐたかい。」

「いゝえ、別に詳しい事は聞いてゐませんが、十五日ばかりこの家に、養生してゐたつて話しました。」

「さうか、その事で實は、艶がごういふ風に欺されたか知らんが、その學生が東京へ來れば、女學校へ入れてやるさか、任せにしてやるさか言つたと言つて、この間から東京へ行くさか騒いでゐるので、今も今とて叱つてゐる所だ。」

實際此奴にも困つたものだ。

わしは實際お前にも申譯がなくて。」

春吉はそれを聞くと、内心はつとしましたが、聰明な青年だけにさり氣なく、軽く笑つて、

「小父さん、冗談ばつかり……。」

艶ちやん、そんな事は言やしないだらう。」

春吉は艶子が、笑つてうなづいて呉れるかと思つたのに、意外にも聞えない振をして
お勝手の方へ立つて行つて終ひました。

「あゝいふ風で、すつかり變つて終つたので、困つてゐるんだ。」

春吉はそれを聞いても、聞かぬ振りをしながら、

「小父さん、今日は外に用事もあるから失禮して、又後でゆつくり伺ひます。」

艶ちやんの事は、私から話をすればよく分りますから、私と一緒に少しの間散

歩にやつて下さい。」

と進まぬ艶子の氣を引立て乍ら人無き海岸通りを辿つて行くのでした。

都に憧憬れて

春吉は静かな裏濱の方へ、人目を避け乍ら、艶子を促しく歩いて行きます。
二人共無言のまゝです。

艶子は或る不安を感じて、

「春吉さん。何處迄行くんですの？」

「當てはないが、唯歩いてゐるんだよ。」

「何か話があるのですか。」

春吉は思はずきつとして、艶子の顔を見凝めると、立止つて言ひました。
「艶ちやん。それがお前の、わしに對しての挨拶かい。」

「だつて外に言ひ様はないじやないの？」

「お前、一體どうしたんだ。」

艶ちゃん、お前本當に、氣が變になつてるじやないか。」

「さうかも知れないわ。私……」

春吉さんにそんなに「見えて？」

意外な返事に春吉は、唇をふるはせ乍ら、

「艶ちゃん、お前、小父さんがさつき言つてゐた事、まさかと思つてゐたがあれは本

當なのかい。」

本當にお前、波に打上げられたとか言ふ、東京の學生に欺されて、變な氣持になつ

たんじゃないか。」

「……………」

艶子は黙つて俯向いてゐて答へません。

「おい、どうだ。お前に限つて、そんな間違ひなんか、起した譯じやないだらう。」
艶子は言ひ難さうに、又怖さうに春吉の顔を見上げて、幾分聲をふるはせ乍ら言ふの
でした。

「春吉さん、私が若し堤さんと、或お約束をしたのが事實でしたら、貴方はどうする
つもり？」

「約束つて、ごんな約束なんだ。」

「そんな恐ろしい顔をしなくてもいゝじやないの？」

「兎に角ごんな約束なのだそれは。」

その譯を言つて御覽。」

「そんなに貴方の様に、初めから怒つて終つたんじや、話が出来ないわ。」
「怒つてるんじやないよ。聞いてゐるだけだ。」
「まあその譯を言つて御覽。」

「じゃ屹度怒らないでね。」

それは若し私が堤さんと結婚するつてお約束をしたら、貴方はどうするつもり？」

「何を、莫迦な！ そんな事が出来るものか。」

一人で二人も良人を持つなんて事が……。」

「まあ、誰が二人も良人を持つなんて言ひましたの？」

「でもお前はわしと結婚する事に、ちやんと決つてゐるじやないか。」

「だから私…… 貴方にお願ひしやうと思つてゐたの。」

「何を？ どういふ事を僕に頼もうと思つてゐたの？」

「あの私…… 婚約の事…… 婚約を解いて頂く事をですわ。」

恐しさも忘れて、艶子は思ひ切つて、さういつては終つたものゝ、足は其處に立ちすくんで終ひました。

春吉の顔はさつと變つて、その左手は、艶子の肩を固く掴みました。

「艶ちゃん。お前今の事を本気で言つてゐるのかい。」

まさかお前本氣じやないんだらう。

私をからかつてゐるのじやないかい。」

「……………」

「何故返事をしないんだ。本當の事を言つて御覽。ねえお前、冗談を言つてゐるんだらう。」

艶子は堪り兼ねて泣出しました。

「春吉さん。勘忍して下さい。」

私貴方にあやまりますわ。」

艶子は砂の上に突伏して、唯泣きに泣くのみです。

春吉は益々いら立つて、

「何を泣くのだ。お前の言ふ事は、わしにはさつぱり分らんのだ。」

堤どかいふ學生と、結婚しやうとでもいふ、約束をしたのか。

おい、艶ちゃん、さうなのかい。」

艶子は小さな聲で、

「え、」

と微かに答へるのみで、尙頭を上げません。

「約束をしたつて？ そんな莫迦な事があるものか。」

だがそんな事は、一時の戯れで、向ふだつてもう忘れてゐるんだよ。

艶ちゃんだつて、そんな事本氣にしないでいいだらう。

唯同じうちにあつたために、若い者同志の心が、戯れを言つただけだらう。

艶ちゃんは又、心からそんな約束をする筈はないんだから……。

ねえ、さうだらう。」

「すみません。堪忍して下さい。」

艶子は尙も泣いてゐて、頭を上げません。

「馬鹿だね、艶ちゃん。」

まあ起きるんだ。よく話をしやう。

お前は私といふ人間があるのに、又婚約するなんて、二重にそんな輕はずみな事をする様な、そんな女でない事はよく知つてゐる。

だからちつとも問題にして、氣になんかしやしない。

お前には悪い一つの癖があるんだ。

それはお前、怒るか知れないが、こんな鳥の娘に似合はない、虚榮心が高いことだ。

それがために、よく身分不相應な幻影を描いて、それにあこがれたりする。

そして實現もしない様な夢を見てゐるのが、お前の悪い癖だ。

それで私の留守に、東京の學生が波に溺れて、この島へ打上げられたのを、お前のうちで救つて介抱したといふ事から、自然にその人と心易くなつて、色々東京の話

なごを、嘘やら誠やら、巧みに取混ぜて、面白さうにお前に話して聞かせたのだらう。

それがたにお前は、その學生が東京へ行けば、どんな華やかな生活でもさせて、幸福にしてやるといふ様な事を言つて欺したので、それを本當に受けて、つれて行つて呉れるなごど、他愛もない話をしたのだらう。

それを本當に信じて、東京へ行けば、美しい所に住み、美しい着物を着、美味しいものを食べて、人から奥様と立てられて、今日は芝居だ、今日は避暑だなごど、いつも美しく着飾つて居られるのだと思つて、こんな島の生活が厭になつたので、東京へ出て行かうなごといふ、うつかりした氣持になつたのだらう。

ねえ、さうだらう。

さういふ間違ひも、お前にして見れば、有りさうな事にも思はれる。

だがお前からそんな事を言はれると、普通の者なら怒つて終ふかも知れないが、私

は決して怒らない。

むしろお前がさういふ心持を持つのを可愛さうと思ふんだ。

若しそんな感違ひをしてゐたのなら、それを改めさせて、將來お前を救つてやる責任者は、私以外には一人だつてありはしない。

私はお前を心から愛してゐるんだから、命をかけてでも、お前を不幸にする様な事はない。

必ず幸福にする自信があるのだが、若しお前がさうした心の迷ひから、私と別れて東京へ行かうものなら、取返しのない事になつて終ふ。

それこそお前は、どんな惨めな運命に翻弄されて、再びこの島へも歸つて來られない様な、悲しい目を見なければならぬのだ。

それを知り乍ら、一時の感情に激昂して、お前を奈落の底につき落す様な事は、私としては出來ないんだ。

私はそれ程學問もない人間だけれど、人並以上に温い血は通つてゐるつもりだ。自分の感情を犠牲にしても、お前に頭を下げて頼むから、思ひ直して、私と結婚してお呉れ。

さうしなければ、お前自身が身を誤るだけじゃなく、お父さんお母さんだつて、ごんなに不幸になるか分らない。

又村の人達から笑はれるのは、決して私ばかりじゃない。

お前だつて決してよい事は言はれやしない。

萬一お前の思ふ様な、立派な身分になれたつて、褒める人は一人もありはしないのだ。

散々弄ばれた揚句、野の道草の様に捨てられて歸つて來れば、村の人達はそれ見た事かと散々罵り嘲つて、ろくに言葉も掛けて呉れやしない。

お前が東京へ行けば、屹度さうなるに決つてゐる。

お前はその夢から、今すぐさめて終はなくては駄目だ。

約束したなんて事は、眞面目に考へなくていゝんだ、先方ではもうすっかり忘れてゐるかも知れない。

でも若し氣にかゝると思へば、私から断りを言つてやる。

それだけの資格は、私にあると思ふ。

ねえさうじゃないか。四年も前から、親と親と一緒にするといふ約束をしてゐるんだし、體は一緒にならないとしても、心と心はもう、どうに一緒になつてゐる仲間だから、その夫である私から、妻の過ちを改めて、間違つた、あるべからざる事件を解消するのは、ちつとも差支へのない事だ。

すぐに私から手紙を出して、断つて終つて上げよう。

それでいゝんだらう。さうすればお前も、心持がさつぱりして、……」

艶子には純情の籠つた、親切な春吉の言葉も、耳に入りませんでした。

「だつて私、何も彼も決心してゐるんですもの。」

「どんなに不幸になつても、私二度とこんな島へなんか、歸つて來ませんから……。」

「私自分の思ふ通りの生活が一日でも出來たら、満足ですわ。」

「春吉はかつとして、その目は血走りました。」

「ではお前は、私がこれ程迄に、自分としての感情を殺して、出來ない忍耐をして、話をしてやつてゐるのに、何處までも私を捨て、両親を捨て、この島を捨て、東京へ行くといふのかい。」

「お前の心は、私といふものから、すつかり離れて終つたのか。」

「勘忍して下さい、春吉さん。」

「貴方が嫌ひなんじやないけれど、私貴方の言ふ通り、虚榮心が高いのか、こんな淋しい島で、一生百姓をしたり、濱へ出て網なんか引いて暮すことなんか、とても堪へられませんの。」

「それより、末はどんな難儀をしても、華やかな都へ出て、一日でもいゝから、着度い着物を着、食べ度いものを食べ、見度いものを見て、思ふ存分贅澤な生活がして見度いのです。」

「それに堤さんといふ方は、そんなに悪い人じやないと思ふの。」

「そして私を、心から愛してゐて下さつて、東京へ出て來れば、假令御両親や兄さんや親戚が何と言つても、結婚して幸福に暮させてやると誓つて下さつたんですもの。その準備のために、私が東京へ行けば、すぐに學校へ入れて下さるつていふお約束もちやんとして下さいさつたんですもの。」

「さういふ甘言を以て、お前を欺したんだ。」

「そんな者はお前の骨までも蝕む悪魔なんだよ。」

「定まつた許婚のある、純真な娘を拐はかす奴は、どうせ東京に巢を喰ふ、不良青年に違ひない。」

「違ふわ。堤さんは立派な資産家の次男で、立派なお兄さんも親戚の方もゐらしたんですもの。」

「そんな大家の息子なら、ごうしてそんな恩のある家の娘なんかを扱はかすものか。いゝ位な不良青年に違ひないよ。」

若し萬一それが資産家の息子だとしても、お前は一時のなぐさみものになるだけで永久性のある道理はない。

田舎者と違つて、東京邊りの人間は、人情が紙より薄いんだから……。

幾らお前が一日でもいゝ、三日でもいゝと言つて、虚榮心を起して、都にあこがれて、そんな浮薄な人の口車に乗つて、東京へ行つても、散々弄ばれ飽かれて捨てられて御覽。

その時に初めて、悪夢からさめたつて、自分を救はれる道がなくなつて終ふじやないか。

都會の花なんか、みんな嘘の作り花ばかりで、自然の香ばしい匂なんてありやしない。

田舎にこそ、色も香も盡さない、本當の純眞な花が咲いてゐて、私達の目を喜ばし

て呉れるんだよ。

悪い事は言はないから、考へ直してお呉れ。

お前は恐ろしい悪魔に魅入られてゐるんだよ。今なら何でもなく、誰にも知られな

いで済んで終ふんだ。

わし獨りの胸に含んで、具合よく解決するから、さういふ迷ひの心はすぐにさまし

て終つて、昔の心に歸つて、私の胸に戻つて來てお呉れ。

なあ、艶ちゃん、さうしてお呉れ。」

愛する者の心弱い悲しさ、カッとして一時は怒つた心も、次第に弱くなつて、男らし

くないと、じつと堪へてゐやうとしても、胸では動悸が高く、目からは熱い涙が滲ん

で出ます。

春吉は命にかけても、艶子の迷ひをさまし、自分の胸に取り戻さうと、命懸の努力を致しましたが、堤のために深く心を迷はされてゐる艶子には、最早やその純情を受入れるだけの真心はありませんでした。

何と言はれても、艶子は答へませんので、

「艶ちゃん、先づお立ち。」

話さなければならぬ事がある。

お前、私が視察に行く時に、誂へたものがあるだらう。」

「何を？」

「忘れたのかい。」

「私何を誂へたでせう。」

「おい、呆けちやいけないせ。箱迫じやないか。」

これを真面目に約束通り買つて来た私に、今の様な事が言はれるかい。よく胸に手を置いて考へて御覽。

今迄の事は何も言はない。すつかり水に流して、一生何も言はない。

だから昔の艶ちゃんに歸るんだ。

さあこれを上げよう。」

と懐から、錦の箱迫を掴み出して、艶子の前へ差出しました。

艶子は、月影にそれを見て、はつとしましたが、首を横へ振つて、

「私頂きませんわ。」

「いらぬか。受取らないといふのかい。」

「でも、私、これを貴方から頂く資格はないのだもの。」

「貰ふ資格がない？何を言つてるんだ。」

と艶子の左手を掴んだ瞬間、手に固い物が觸れて、ピカリと光りました。

「おやつ!! この指輪は?」

「私、堤さんに頂きましたの。」

「何? 堤さんに貰つた?」

そしてお前は、……それではお前は、堤と本當に約束したのか。」

「え、私……」

「こんなものを返して終へ。」

「だつて今更返されませんわ。」

「何故返されないんだ。送つてやればお終ひだよ。」

と無理に脱き取らうとしますと、艶子は夢中で指輪を押へて、

「私はその方に、もう返して頂けない、贈り物をしてしまつたんですもの。今更これを返したつて、仕方がありませんわ。」

「何? 取返しの出來ない贈物だつて?」

と言つた春吉は、思はず電光に打たれた如く、艶子をそこへ突き倒すと、自分は二三歩後へ引退つてはつたり砂の上へ突伏して、悶えに悶えて男泣きに泣きました。

艶子は今更乍ら、春吉の悶えの激しいのを見て、

「春吉さん、勘忍して下さい。私あやまりますわ。」

ねえ春吉さん。」

と縋りつくのを、春吉は力限り突き退けて、

「近寄つて呉れるな。汚ららしい。もう私には口も利くな。」

と其處にあつた箱迫を取り上げると、力に委せて叩きつけました。

艶子は春吉と一緒になつて、唯譯もなく涙び泣くのでした。

千鳥ヶ濱

六六〇

その翌日艶子は、両親にも春吉にも、村の誰にも無断で、人目を避け乍ら、朝一番の船で、東京へ行つて終ひました。

後には両親にも春吉にも、自分の罪を細々しく詫びた書置がありました。春吉は今更それを見る氣にもなれず、そのまゝ艶子の両親の前で引割いて、踏みにつて終ひました。

両親は春吉がどんなに腹を立て、も、尤もだと深く同情し、艶子の心を憎んでゐるので、一言も口を利かず、唯

「済まぬ。済まぬ。」

とだけ繰返すのでした。

「濱からあんな男を救つて来て、世話をしなければ、こんな苦しい思ひをせず済んだのに……」

恩を仇で返されたはこの事だ。

あの悪魔のために、娘一人臺なしにされて終つた。

春吉に何と言つてお詫びしてよいか、言ひようもない。」

と與平が情なさうに言ふと、母親も

「本當に悪い者の世話をして、ひどい目に合ひました。

あんな男ならうちへ、つれて来なければよかつた。

今更愚痴を言つても、取返しつかぬ事だが、あんな男はあのまま、濱で死んで終へば好かつた。」

「何も悪縁でどうする事も出来んことだ。」

六六一

あの男を見付けたのは、慥かにお艶だつたであらう。

「矢張り悪い因縁に結ばれてゐたのか知らず？」

あゝ、何と言つたつてどうなるものか。

あんな者は無い者だと思つて、諦めて終はねば仕様がなない。

「お艶の事は、自分で心得違ひをして、飛出して行つて終つたんだから、どうならうともかまはんが、春吉に對して何とも申譯がなく、辛いんだよ。」

「お父さん、お静でもうちにゐたら、何とか春吉さんに考へ直して貰ふ事も出来たかも知れんが、あれも長い事京都へ行つてゐるんだから、こんな田舎へ歸つて来て、暮す氣になる筈はなからうし……。」

「ごちらへしたつて、この家は春吉に立て、貰はなければ……。」

外に相續者もないんだ。それに春吉はこの家の血を引いてゐるんだから、外から嫁を貰つたつて、血縁の絶える筈はない。

兎も角この家は春吉に、氣に入つた嫁を捜して貰つて、立て、貰ふ事に頼まなけりや、仕様がなないよ。」

「さうですとも、この家は春吉に立て、貰ふ外はないのですよ。」

と言ふのを、黙つて聞いてゐた春吉は、

「小父さんや小母さんには御同情します。」

全くかういふ事になるのも天命ですよ。

誰が悪い、彼が悪いといふ事はない、みんな運命の悪戯です。

私は艶ちゃんの心持を變へさせようと、随分苦心して説いて見たんですけど、どうしても取り返すことが出来ませんでした。

矢張り私と結婚する因縁がなかつたんですね。

私も落付いて考へて見ました結果、斷然過去の事は諦めて終つて、艶ちゃんの將來の幸福を祈つて上げようと、今では考へてゐます。

それにしても唯うるさいのは、みんなの噂です。

私の顔さえ見れば、みんなして冷笑しますので、男の意地としても、このまゝ村にも居悪い氣がしますから、當分何處かへ行つて、力限り何か面白い仕事でも見付けて働いて、氣持の變つた頃歸つて來ようかと思ふのです。」

「さう思ふのも尤もだ……。がまあ餘り短氣な事は思はずに、村に居つてお呉れ。人の噂も七十五日といふから、その中に言はなくなるだらう。」

悪いのはお艶だけだ。

みんなお前には同情こそして居れ、誰も悪く言ふものはないんだから……。

お艶だつて、あゝして無斷で飛び出して行つたものゝ、一月とたゝぬ間に詫びて歸つて來るに決つてゐる。」

春吉は淋しく笑つて、

「艶ちゃんは今更歸つて來たつて、私には何の係りもない人なんですから。」

そんな心持で待つてゐるかと、村の誰にも思はれ度くないんです。

男には變な意地があります。兎に角私は四五日考へさせて貰ひ度いのです。當分お邪魔せぬかも知れません。」

と春吉は、挨拶してお艶の家を出ました。

その後の春吉は、餘り晝は村の人達の目にも止まらず、逢ひに來る人があつても、留守だと言つて、仲よしの友達にも逢ひませんでした。

春吉が若し黙つて村を出る様な事があつては、大變だからといふので、艶子の父は船の出る度に濱へ行つて、見張つてゐましたが、出て行く様子も見えませんでしたので、

「どうしてゐるだらう。」

と心にかけて心配して居りました。

艶子が家出してから七日後、矢張り月夜の晩でした。

春吉は獨りで千鳥ヶ濱へ來て、波打際に仰向きに寝て、晴れ渡つた空を眺め乍ら、

物思ひに耽つてゐましたが、いつしか心は都の空へ飛んで

「お艶は今頃どんな所に、どんな心持でゐるのだらう。

何れ今頃は生れ故郷も両親も忘れて、夢中になつて虚榮の夢の世界を泳ぎ廻つてゐる事だらう。

お艶の心の片隅にも、自分の影などは残してゐやしないだらう。

それにしても自分は、何といふ惨めな運命に弄ばれなければならないのだらう。

日頃愛してゐたお艶と、親が許して婚約した時、かくし切れない喜びを胸に抱いて改めてお艶を見直した時、自分はこの島一番の幸福者だと感じた。

それから徴兵検査に合格して、入營してからも、いつもお艶の寫眞を肌身につけて人知れず眺めては愛しく思つてゐた。

除隊して結婚する日を、一日千秋の思ひで待つてゐたし、お艶からも三日にあげず、優しい手紙を受取つて、友達からも何度ひやかされた事か。

中隊中でも自分程幸福な者はないとさえ思つてゐた。

除隊して島へ歸つた時、お艶が嬉しさうに、微笑んで立つてゐるのを見て、自分はどんなに喜んだ事だらう。

さうして毎日お艶の家へ出入して、親しく交つてゐたが、心は一緒に切り切つてゐても、體だけは完全に純潔を守つてゐたのは、將來の大きな幸福の爲を、考へたから男子としての慎しみを、固く守つてゐたのだ、その心持が、お艶には分らなかつたのか。

祭の晩にあんなに楽しく語り合つて、固く誓つて秋の結婚を喜んで、京都へ行つたら箱迫を買つて來いと言つて、婚禮の日に持つ物だからと、私に注文したではなかつたか。

身分に過ぎた物だとは思つたが、お艶の妙な虚榮心が、一部でも箱迫で満足させてやれたらといふ様な、變な愛情から、驚く程高價な物を買つて、お艶を喜ばせやうと

楽しんで持つて来たのに、何といふさまだ。

こんなものはもういらないと、女の方から突返されて、その上得體の知れない男から貰つた指輪を見せつけられるとは。

當然の夫の權利に依つて、不純な指輪を抜き取つて、叩きつけてやらうと、意氣込んだ男の意地も張もあつたものじやない。

箱迫と共に私はあの濱に叩きつけられたのだ。

「この指輪は返されない。

取返すことの出来ない贈物を、堤に贈つて終つた。」

とは、何といふ侮辱だらう。

自分は何故あの時に、彼女を打つて打つて打ちのめして、足腰の立たない不具者にもしてやらなかつただらう。

だがそれが、どうしても自分には出来なかつたんだ。

身の置き所もない迄に悶え、男泣きに泣き乍らも、彼女を打懲すことが出来なかつた、矢張り自分は弱い男だ。

さうして自分は友達に顔を見られるのも面目ないと、人目を避けて、こんな淋しい生きた屍の様な、生活をしながらも、心の何處かにまだお艶を憎めない、寧ろお艶の幸福を祈つてやり度い様な心持が動いてゐる。

こんな自分、男として意氣地がないのか。

それともこんな目に遭つても尙、憎めない迄に自分はお艶を愛してゐるのか。

それにしても、何時までもこんなにして悶えてゐては果しがない。

早く過去を清算しやう。

さうして新しく更生した春吉に歸つて、強く生きるために、總べてを解決しやう。

それには自分の心持を亂す、この箱迫を海に投げる事だ。

思ひ切つてあの海へ投げ込む事が、自分の新しい生命を取返すことだ。

と考へ及ぶと、ガバと起上つて、懐に入れてゐた箱笥を掴んで、ぬつくと立上ると固く握つて今一度それを眺めてから、思ひ切つて、海に投げ込まうと、二三歩海へ近づきました。

里　　ご　　ろ

丁度その時思ひがけなく後から、

「もし、そこにゐらつしやるのは、春兄さんじゃないの？」

思ひがけない聲にはつとして、後を振り返ると、二三間隔つた松の木の蔭に、白百合の様にすつきりとした、美しい娘が現れて、自分の方へ近づいて来るのです。春吉は怪訝さうに、

「誰です、貴女は？」

「矢張り春兄さんだわ。」

お目にかゝれてよかつたこと。

と如何にも親しきうに近づいて來ます。春吉にはそれが誰だか分かりません。

「一體貴女は誰です。」

娘は微笑み乍ら、間近まで進み寄ると、

「まあ、お忘れになつたの？ 私を。」

「一體貴女の様な人は、この島にはない筈ですが……………」

「まあ、あんな事を仰有つて……………私、静ですわ。」

春吉は少からず驚きました。

「静？ 静つて言ふと、艶ちやんの妹のお静ちやんか。」

「え、さうよ。やつと思ひ出して下すつたのね。」

「しかし、君は本當にお静ちゃんかい。」

「本當にも、嘘にも、静は私一人しかありませんわ。」

「だけども違ふ様な気がするよ。お静ちゃんと逢つたのは、ずっと以前なのだから……、その頃はまだ子供だつたよ。」

それに今じや立派な町の娘さんになつたんだから、誰だつて見違へるよ。

何時歸つたんだい。」

「私今朝歸つて來たんですの。」

「さうかい。ちつとも知らなかつたよ。」

「知らない筈ですわ。春兄さんは幾ら捜しても、何處にもゐらつしやらないんですもの。」

お父さんも大變心配して、血眼になつて捜してゐますわ。

どうしてうちへ來て下さらないの？」

「一寸行き度くない譯があるんだよ。」

私は一人限りでこのまゝ眞劍で考へる必要があつたから、誰とも逢つてゐないんだよ。」

「私春兄さんのお心持、充分お察ししますわ。」

「お察しするなんて、何かお父さんやお母さんに聞いたかい。」

「え、全部聞きましたわ。」

姉さんは何といふ莫迦なんでせう。春兄さんの様なしつかりした方に背いて、得體の知れない人に欺されて、東京の邊りへ行くなんて、今にひごく後悔するに決つてゐますわ。」

何故春兄さんは、姉さんを止めて下さらなかつたの？」

「それはお前、私としては命がけで止めたんだが、しかし姉さんを止めるだけの力がなかつたんだよ。」

「だつて純真な、本當にしつかりとした愛の力で止めて下さつたなら、姉さんだつて
 屹度思ひ止まつたに違ひないと思ひますわ。」

「いや、ごんな真剣な愛の力でも、姉さんを止める事は出来なかつたんだ。」

姉さんの心は美しい、都のあらゆる虚榮の夢に囚はれて終つてゐるんだから……。」

「さう仰有れば、本當に姉さんの性質は、矢張り小さい時からいけなかつたんですわ。
 身分不相應な虚榮心があつて、華やかな夢ばかり見て、その中に眠つてゐたい様な
 變な心持でしたもの。」

それが運悪く天魔に魅入られて、遂に誘拐されて終つたのです。」

「しかし静さん。」

貴女は永い間京都へ行つてゐたから、町の生活はよく分つてゐるだらう。

都には本當に人の幸福があるのですか。」

「いえ、全然ありませんわ。」

私十四の時伯母さんにつれられて、京都へ参りまして、随分立派なお邸や、お金
 持の家にも小間使ひに上つて居りましたけれど、町のお金持や、立派な地位や名譽
 があつて、表から見ると、立派なお邸に住んで、美しい着物を着たり、おいしいも
 のを食べたりして、一寸出るにも車で送り迎へして、何不自由ない御身分だと、人
 に羨ましがられる様な、お邸の旦那様などは、殆ど皆といふ程、御品行が悪く、花
 柳界へ出入りして遊ばれたり、御妾宅が何軒かあつたりして、奥様やお子様達がお
 邸にゐらしても、落ついて御一緒にお食事なさる事も稀な位です。
 それで大概奥様方は氣を病んで心配してゐらつしやるので、半分はヒステリーの様
 になつてゐらつしやいますし、氣の大きい方は御自分でも、負けない氣になつて、
 不品行な行をなすつたり、又淋しさを紛らすために、呉服屋を歩いて澤山お召物
 を買つたり、又怪し氣な人達と、お芝居や活動などを見にゐらしたりして、殆ど幸
 福だなどといふ御生活は見られません。

それは一部分の方かと思へばさうではありませんの。
 大勢お寄りになると、みんな同じ様なお話をなすつて、嘆いてゐらつしやいます。
 お金持のお邸は、皆さうした冷たい空虚なものです。
 實業家などになりますと、毎日々々掛引ばかりで、目まぐるしい様で、落付いて誠
 の生活を、しんみり味はふといふ様な事は、殆ど私見た事がありません。
 都の人は皆外の人を見る目が違つてゐて、油断してはいけません。どんな事をする人
 か知れないといふ風に考へてゐるので、隣同志に住んでゐても、同じ車に乗り合せ
 ても、打融けた心持で、お話し合ひするといふ様な事は、絶対にないのです。
 私もう四年間都に居りまして、つくづく町の生活に、身も心も疲れ切つて、神経
 衰弱にかゝりさうになつて終ひました。
 都の生活なんかを、楽しからうなごごあこがれるのは、都の裏面を知らない田舎の
 うぶな娘なんですよ。

私かもう少し早く歸つて來ましたら、決して姉さんを東京へなんかやるんじやな
 かつたんですわ。

私なら屹度止める事が出來たのに、残念ですわ。」

「それでも、静さんは又、京都へ歸つて行くんだらう？」

「ごうか分りません。」

本當に京都へなんかもう行かないで、田舎に一生ゐたいんだだけ……。」

君が胸に

春吉は吃驚して、

「静さんは田舎にゐたいの？ この島で一生暮し度いといふの？」

そんな美しい顔をして、そしてそんな白い手や足をして……。

「あら、私だつて、野へ出たり濱へ出て、みんなと一緒に働き出したら、いゝ位日焼けして、黒くなりますわ。」

「本當に静さんはそんな事を思つてゐるのか。」

「だつて生れ故郷ですもの。一番この島が懐しいわ。」

春兄さん、貴方もこの島から何處へも行かない方がいゝのよ。

何處へ行つたつて、幸福なんて絶対に待つてなんかあませんもの。」

「勿論そりやそうさ。」

私は別に町をあこがれてもゐないし、捨てゝ去つた艶ちゃんの後を追はうといふ氣もないしさ。唯今迄が今迄だつたから、急にこんな事になつて、男の意氣地がないと言つて、笑はれる様な氣がするから、暫らく何處かへ二三年行つて、思ひ切つて活動して、氣分をかへて歸つて來て、それからこの島のために働かうかと思つて、色々迷

つたんだが、漸く今夜決心がついた所だ。」

「どういふ風に決心なさいましたの？」

「今迄の事は夢だと思つて忘れて終つて、新しく生れ更つた氣で、この村のために全生命を捧げて生きやうと、決心がついたんだよ。」

「まあ嬉しい。」

春兄さんがそんなにきつぱりと、姉さんの事など忘れて終つて眞劍で働いて下さつたら、村の爲にだつて仕合せですし、うちのお父さんやお母さんだつて、どんなに喜ぶか知れませんか。」

「さうだ！。取返しつかぬ事を、いつまでも悶えてゐるより、早く男らしく諦めて終つて、自分は新しく更生して、艶ちゃんの前途の幸福を心から祈つてやる方が意義があるよ。」

「本當にさうして下さい。」

私もそれを伺つて、本當に嬉しく思ひますわ。」

「それに就ても静ちゃん。」

過去を清算して、改めて更生するしるしに、棄てなければならぬものがあるんだ。」

「何ですのそれは？」

「静ちゃん、これだよ。」

「まあそれは箱迫じやありませんの？」

「さうだよ、これは先達、私が視察に出かける時、姉さんが秋の結婚のために、買つて来て呉れど頼んだから、私が京都で買つて来たんだが、姉さんに別れる最後の日に不用物だと言つて叩きつけられたんだ。」

これさえもう歸つて来ない様に、海へ投げ込んで終へば、さつぱりして更生する事が出来るんだ。」

それで今捨てやうと、立上つた所へ静ちゃんが来たんだ。」

静子は目を瞠つて

「まあ惜しいわ。」

折角真心をこめてお買ひになつたものをお捨てになるなんて……………」

お捨てになる位なら、私に下さらない？」

春吉は思ひがけない静子の言葉に、じつとその美しい顔と初々しい純真な瞳を見つめてゐましたが、

「静ちゃん、お前これを貰ひ度いといふのかい。」

「え、私が頂いておいてはいけないのですか。」

「姉さんの代りにかい。」

「え、頂けましたら、私頂き度いわ。」

春吉の目はいよく輝き、静子の右手をしつかり掴み、力のある聲で言ひました。
「静ちゃん……………」
本當に欲しいなら、私は満腔の誠意を以て、お前に貰つて貰ひ

度い。

寧ろ姉さんに上げるより、二倍も三倍もの眞心をこめて、貰つて貰ひ度いんだ。

だが私は名譽ある帝國在郷軍人だ。

そしてこの村の模範青年と言はれ、次男だけれど、青年團長をしてゐる責任上、人一倍の自尊心があるんだ。

男子だけれども、永遠の人間として、又夫婦生活上の絶對の幸福の條件として守るべきものは、しつかり守つてゐたんだよ。

しかし姉さんは、その私の心持を理解して呉れなかつた。

命にかけて私が守つて來た、姉さんの持つ寶玉を、一寸した間に他の人に奪はれて終つたんだ。

もはや姉さんはこの島にゐても、この箱迫を、寶玉は失つてゐたし、私も斷然命にかけても渡しはしなかつた。

それ程の因縁あるこの箱迫を、静ちゃん欲しいといふからには、それだけの價値ある、女としての寶玉は静ちゃんの信念で、しつかり守られてゐるの？ それをはつきり答へて下さい。」

「まあ一生苦樂を共にすると、固く信じ誓つて、親から許されて、結婚した事もない私が何うして命より大切な寶玉を失つてなごゐませう。

でも私……そんな女に見えまして？」

「いや絶對にそんな風には見えない。だが大切な事だから聞いたんだ。静ちゃんの今の言葉を聞いて、本當に私は安心した。

だがお父さんやお母さんのお心持はごうなんだらう。」

静子は一寸はにかんで、

「春見さんさえ承知して下さつたら、本當に結構だけれど、そんな事は餘りにも厚かましくて、言ひ出せないつて言つてましたわ。」

「さうか。御父さんや御母さんがさう云つて居られたか。

この間も静さんがうちにゐたらつて言つてゐたのを聞いたから、では屹度許して呉れるだらうね。」

「でも私……姉さんの代りに、私なんかで貴方は諦めて下さるの？」

「冗談じゃない。」

姉さんより、幾倍幾十倍眞剣な力で、私はお前を愛することが出来るか知れやしな

いよ。

小さい時だつて、随分可愛がつてゐたじゃないか。」

「まあ、あの頃の事も覚えてゐて下さるの？ 私本當に貴方と結婚して頂いたら、こんなに幸福が分りませんか。」

「静ちやんが眞にさういふ心持でゐるんだつたら、こゝで約束しやうね。」

そしてこれを上げよう……本當に固く誓へるね。」

じや純眞な眞心で受取つてお呉れ。」

「有りがたう……私本當に嬉しいわ。」

私……本當に姉さんに、心から感謝しますわ。」

「さうだ。私は今の今迄あんなに不幸だつたのに、こんなに瞬時の間に幸福になれるなんて、全く夢の様だよ。」

静さん、これは夢じゃないだらうね。」

夢で消えてなくならない様に、しつかり僕の手を握つて呉れないか。」

「本當に夢じゃありませんわ……夢だとしたら、何時までも覺めない、永遠の夢ですわ。」

「静ちやん。」

「春兄さん。」

と二人は固く手と手を握り交しました。

二人の前途を祝福する様に、月夜の濱には、千鳥がチ、チ、と鳴いてゐます。

晴れ行く空

その年の秋、春吉と静子は、目出度く華燭の典を挙げました。

鴛の契りも濃やかに、村人も羨むばかりの、幸福な家庭を営んで、老いたる父母に懇ろな孝養を盡し、村の誰彼の羨望の的となつて居りました。

翌年冬には、玉の様な男の子も生れ、家庭はいよ／＼幸福に満ちて参りました。

春吉はまだ春秋に富む青年乍ら、村人の信望を一身に集めて、水産組合を立て、水産業の開發に努めると同時に、農業の改善等にも、全力を注ぎ、海陸共に島の發展のために力を盡しますので、この島になくてならない名物の一人に數へられ、その信

用は愈々高く、その人望は都の人にも聞える様になつて参りました。

かくて行く日、静子は昔華やかであつた都の生活は、すっかり忘れて終つたものゝ様に、純真な島の、實着な女房、子供に、
の形に添ふ様に、夫を助け父母に孝養を盡し乍ら、子供の養育をしつ、甲斐々々しい姿で、野に濱に汗を惜しまず、その日の業にいそしみ、幸福な月日は明け暮れて行くのでした。

唯両親だけは、若き夫婦が相睦み合つて、平和な語らひを見るにつけ聞くにつけ、家を出てから唯の一度も便りをしない、お艶はどうしてゐるのかと、二人ざりになるどそれを語り合つて、涙の袖を搾るのでした。

諦らめてはゐても、諦らめ切れない肉身の親の尊とさを、それと察して二人は、心秘かに同情して、それとなしに慰さめる事を忘れませんでした。

祝ひ日などの御馳走は、父母が氣づかない前に、静子は姉の陰膳に備へて、その前

途を祈るのでした。

里に咲く花

或る日春吉が組合へ行つて、何心なく東京の新聞を開いて見ると、立派な新郎新婦の結婚寫眞が載つてゐました。

それには新郎は堤直人、新婦は長森民子として、直人は實業家の長森家へ養子縁組したといふ記事が載つてゐました。

春吉は吃驚して、思はず顔色を變へましたが、妻や父母にはそれとは言はず、その夜は或る一種の不安に驅られて、安眠する事が出来ず、遂夜が明けて終ひました。翌る朝、静子は何氣なく、

「私又赤ん坊が出来た様ですわ。」

と両親に話して喜ばせてゐます。

春吉は言ひ知れない幸福感に、昨夜の厭な心持を打消し乍ら、組合へ行つて、又何氣なく新聞を見ると、不忍池の蓮の中に、二十歳前後の美人の溺死體が浮いてゐた。懷中してゐた遺書には、父なる奥田與平に宛て、

親に背いた不孝の罪を懇々詫びて、信する者と世に欺かれ背かれた、愚かな女の末路の、如何に憐ないかといふ事を、細々と訴へ、最後に深い罪を詫びて、生きる苦痛から脱れるために身を捨てる。

といふ事が認めてあつたと掲載されてゐました。

春吉が顔色を變へて、立上ると同時に、静子が電報を持つて走つて來ました。

言はずと知れた、東京上野の警察から來た電報でした。

両親は唯言葉もなく、泣くばかりでした。

二人は三つの長男を父母に預けて、直ちに東京へ出向き、警察署で、哀れに妻れ果てた姿で、菰の上に寝かされてある、艶子の遺骸に二人は思はず、泣き縋りました。その翌日警察の世話を受けて、茶毘に附し、小さな骨壺へ入れて、島に持帰り、盛大な葬式を致しました。

新しく盛り上げられた墓所に立てられた「釋妙艶」と書かれた卒塔婆の前に立つた春吉は、流石に感慨無量の涙を、惜しみなく捧げました。

その時から誰が作ったのか、この島には次の様な唄が流行り出しました。

都に咲くのは虚榮の花よ

里にや誠の花が咲く。

それから幾年か移り變つて、この純真な村には、四季共に純真な香りの高い花は咲き匂ひ、里人を楽しませ、年毎に大漁と豊年を祝ふ祭の笛や太鼓は、賑やかに聞えるのでした。

(終)

筆を擱くにあたりて

謹んで本書讀者にお断り申し上げます。

本書の著述にかゝりました最初は、私一生二代の力作として、相當に君國と愛讀者の皆様に貢献する事の出来る價值あるものを書き上げやうと、終始一貫、身心を清めて獻身的努力を盡くしました。けれども、何分先天的才能に恵まれてゐないので、勉強が足りない爲に、淺學無能でござるまして、一般常識智能に缺けて居ります爲に、皆様に御満足して戴く事が出来る程の著書を書き上げることが出来なかつた事を深く赤面致します。

然し乍ら、あらゆる社會に實際行はれてゐる正しき人の道から踏み迷つて、一生暗黒の道に悩む惨めな人を、お救ひして、常に大光明輝く永遠の幸福な道へお導き申し

上げて、嘘偽りと争ひの絶えぬ道義すたれつゝある世の中から、感謝と報恩の純情が
真心の中に真紅の火と燃えて、共に助け、信じ、愛し合ひつゝ、人情の華が充滿して
芳香のたゞよふ麗しき社會につくり替へて、吾身のみでなく、子孫幾世の後までも、
君國と共に榮えるといふ深い信仰的信念を祈り籠めて書き上げた云ふ事は事實で
ござります。

文章は拙くても、内容に祈りを込めてあります。人の道への願ひをお認め下さいま
して、多少とも今後波風荒き實社會をお進み下さいます御参考になりますならば、著
者の満足これに過ぎたものはござりません。

昭和八年仲秋

龍子

8.11.17

昭和八年十一月十一日印刷
昭和八年十一月十五日發行

定價 金貳圓

不許
複製

著者 岐阜市田生越町 片桐龍子

印刷者 岐阜市七軒町十二番地 河田貞次郎

印刷所 岐阜市七軒町十一番地 西濃印刷饅岐阜支店

發行所

岐阜市田生越町 忠誠婦徳會

電話二三四五番
振替名古屋一六三九〇番

本會發行の書籍

日本婦人の使命と	其の修養	片桐龍子著	定價 金 貳圓 (郵稅拾貳錢)
宗教小説	天界地界 前編	片桐龍子著	定價 金 貳圓 (郵稅拾貳錢)
宗教小説	天界地界 後編	片桐龍子著	定價 金 貳圓 (郵稅拾貳錢)
理想小説	眞珠の塔	片桐龍子著	定價 金 貳圓 (郵稅拾貳錢)
事實談	烈女の鑑	中田武雄著	定價 金 壹圓 (郵稅拾貳錢)
教育小説	輝く道	片桐龍子著	定價 金 貳圓 (郵稅拾貳錢)
理想小説	心の華	片桐龍子著	定價 金 貳圓 (郵稅拾貳錢)
皇軍慰問日記	國境を越えて	片桐龍子著	定價 金 貳圓 (郵稅拾貳錢)

教育修養雜誌

御國の華

定價一部 金貳拾錢
一ヶ年前納 金壹圓貳拾錢

本誌は一般地方青年處女又主婦の處世及び家事百般の常識修養雜誌として毎月一回發行致して居ります。本誌は普通の雜誌社發行の趣味雜誌とは、全然内容を異に致しまして精神的修養並に實際の常識指導を目的使命として、獻身的に努力致して居ります。

岐阜市田生越町

發行所

忠誠婦徳會

編輯者

片桐龍子

電話二三三四五番
振替口座名古屋一六三九〇番

今後重大な國家社會のため、又家庭の一員として完全なる使命を果し、人生最大の幸福を得んと望まれる方は、是非本誌を御愛讀下さる事を御勧め致します。

終

